◆茅ヶ崎同盟教会たより　２０２４年6月

民よ、どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を、神の御前に注ぎだせ。神はわれらの避け所である。　詩篇６２篇８節

「憎しみのあるところに愛を、争いのあるところに赦しを、分裂のあるところに一致を、疑いのあるところに信仰を、誤りのあるところに真理を、絶望のある所に希望を、闇のあるところに光を、悲しみのあるところに喜びを。ああ、主よ、慰められるよりも慰める者としてください、、、」有名なアッシジのフランシスコの「平和の祈り」です。

私はこの詩をベルコンサートの時に聖歌隊で歌い知りました。すでにご存じの方もおられたかもしれませんが実は私は今回「祈りのレッスン」　（柳下明子著）を読んで初めて知ったのですが、この詩は１９１３年１月発行のフランスのカトリック「信心会」の年報「平和の聖母」に掲載され、１９１６年にバチカン発行の「オッセルヴァトレ・ロマーノ」紙で公認されたものだそうです。フランシスコの聖画カードの裏面にこの祈りを印刷し、配布したのがフランシスコの「平和の祈り」と喧伝され、広がって行き、第２次世界大戦終了後には国連の会議で１議員が紹介し広く伝わって行ったそうです。彼自身がこの祈りを持って生きた人だったのでしょう

彼の有名な祈りの話があります。フランシスコの仲間が彼がどんな祈りをしているのかを聞こうと、自分の家に招待し、泊ってもらったところ、フランシスコは朝まで「私の神、わたしのすべてよ」（my God and my all）と、ただひたすらこの短い祈りを朝まで涙ながらに祈り続けていたそうです。この本の中で、どう祈ったらよいか悩むときこの祈りを思い出すと良いでしょう。とありました。この短い祈りの中に、私の神様は、私のすべてです。私の全存在は神様、あなたによって造られ、あなたのものです。どうぞ憐れみ、守り、導いてください。私のすべてをおゆだねします。と心を注いだ祈りであると思いました。朝に夕に信仰告白として感謝し祈りたいと思いました。

伝道師　川島正子